

## ●旧海軍飛行場が前身

宮崎と世界を結ぶ空の玄関口として「宮崎空港」の充実ぶりが目覚ましい。韓国とを結ぶ定期便、地元資本による東京便就航など、利便性が急上昇、ビジネスや観光に果たす役割は計り知れない。

宮崎空港は一九四三（昭和十八）年十二月、旧海軍省赤江飛行場（滑走路千五百メートル）として建設。その後、もはや戦後は終わったといわれた五四（同二十九）年、宮崎交通が業界に先駆けて民間航空への参入をはかり、新しい空港へと生まれ変わった。同年十月には運輸省の「航空大学校」も開校された。

六六（同四十一）年十月には全国の地方空港で最も早くジェット便を就航させた。空港ビルの完成は六三（同三十八）年。当時、先頭に立つて空港の充実に取り組んだのが宮崎交通社長・岩切章太郎氏（故人）。



空の玄関口。世界に向けて宮崎情報の発信拠点

「宮崎はちょうど観光ブームの最中。岩切社長はジェット機から降りて来る新婚客や団体客を自社のプラスバンドとガイドで出迎えたり、サインハットをプレゼントしたりと、心のこもったもてなしにつとめられた」。空港ビル常務の長浜安広さんは当時を振り返って話す。

空港の発展に弾みがついたのは九六（平成八年七月）のJR乗り入れ。全国の地方空港でJR、地下鉄などの乗り入れは初めて。「宮崎空港発博多行き」の特急も運行され、便利さを全国にアピールした。県北住民の利用が多く、高速交通網整備の遅れをカバーしている。

二〇〇一（平成十三年）年、宮崎—ソウル間に「アジアナ航空」が就航。宮崎空港は国際化時代に入った。それに合わせて空港ビルも増改築。ビル東側には歓迎セレモニー用の「ウエルカム広場」も設けられた。韓国からの観光客も増え、

特に冬場はゴルフ客が目立っている。

さらに宮崎—東京間に〇二（同十四）年八月、地元資本による「スカイネットアジア航空」が新規参入、現在一日六往復運航している。運賃をはじめ、サービス面の改善をはかりながら、県民の足としての発展に期待も大きい。

「九州・沖縄サミット外相会合」「太平洋・島サミット」などの開催を通して、世界に「国際コンベンション都市」を発信、さらなる二十一世紀への飛躍を目指す宮崎にとって、宮崎空港の存在は重みを増すばかりである。南国らしい近代的明るさの空港ビル。宮崎空港を拠点に、新たな発展への夢が広がる。

三又 喬